

ひとつの林檎

あまずつぱくて冷たい冬のりんごを口にする時、私は、あるひとつの林檎を思い出します。

五年前の一月、沖縄の激戦地、南部戦跡を訪れた時のことです。摩文仁の丘の（平和の礎）が、海に向かって扇状地のように広がっていました。美しく並ぶ無数の石の屏風は寄せ来る波を思わせます。ひとつひとつの礎には白い文字で、沖縄戦で亡くなられた二十四万人のお名前が、ぎっしりと刻まれてありました。礎と礎の間を歩いて歩いて、やっと長野県の礎を探しあて、聞き慣れた苗字が並んでいる一隅をみつけました。長野県のことら辺りの戦没者の皆さんにちがいないと思っていると、私と同じ「古畑」が目に見え込んできました。「遠い親戚だったかもしれない。」「もしかして私は、親族のどなたかと会っているのかもしれない。」「しきりと思われ、お名前を指で触れた無言の対話。その石の冷たさ。

平和公園の随所に、日本中の都道府県慰霊碑があります。石畳を歩いた向こうに（信濃の塔）がひっそりと建っていました。長野県沖縄戦死者一三七六名の慰霊碑です。ゆっくり一歩一歩近づくと、そこに林檎がひとつ供えてありました。だれが供えたのでしょうか、はるばる信州から、どんな思いで置いたのでしょうか。沖縄の冬の潮風にさらされながら、ぽつんとあった、その情景が忘れられません。

あの時から縁あって、沖縄の知人に信州のりんごを贈るようになりました。時期になると、みずみずしい信州のりんごを食べてほしいとしきりに思うのです。昨十二月には、七十年前の対馬丸撃沈の生存者の方（当時四年生）に贈ることができました。もうおひとり、映画「GAMA 月桃の花」のモデルであり、九十五歳の沖縄最高齢の語り部です。りんごのかおりの洩れる箱を開けると、紅い顔したまあるいりんごたちが行儀よく並んで、「見たことない海を渡って遠くまできたのだな」そんなつぶやきが聞えてきそうな気がします。こんなに美味しいりんごは初めてと、喜んでくださいました。おふたりとも戦争の地獄を生き、どんなに高齢になられても、「これが戦争なのです」と、今なお命の限り体験を語り伝え、平和を訴え続けていらっしやいます。

あの（信濃の塔）のひとつの林檎のように、送るりんごに平和の思いを込め、戦没者の御霊にも届きますようにと祈りました。りんごは、平和としあわせ、信州のころろだと思っからです。